

訓註『誠拙禪師語録』その一

鈴木省訓

今回より、『誠拙禪師語録』の訓註を試みることにする。本書は、駒

沢女子短期大学、仏教学研究室に蔵される、倉光大愚編集によるものを
底本とする。

誠拙禪師とは、鎌倉円覚寺、中興開山の誠拙周樗（一七四五～一八二〇）である。誠拙は、伊予（愛媛県）宇和島に生まれる。幼にして佛海寺靈印のもとで出家。後、武蔵、永田の宝林寺の月船禪慧に参じ、また、峨山慈棹に参じ、月船を嗣ぐ。文化十一年、円覚寺に出世し、百廃を一興する。後、補陀山玉泉寺に退居す。後、京都より再三の請により、天龍相国の僧堂等を開担するなどし、文政三年六月二十八日示寂する。著書に『正法眼』一卷、『雲門関』二卷、『忘路集』などがある。大正八年、大用国師と諡される。

以上が、誠拙の略伝である。（昭和六十二年十二月戒道会を前に脱稿）

凡 例

- 一、底本は、倉光清（大愚）校、大正十年刊のものを用了。
- 一、各段落の切り方は、底本にしたがった。
- 二、印刷上、文字は、活字用正字を用い、旧字体の使用は、やむをえない時のみとした。

誠拙禪師語録 上巻

侍者 某甲編

大愚道人校

円覚前版寮秉拂

一 釣語「跛脚の老将、你知り、我知る。紅旗手に在り。鼓を奪う者は誰ぞ。参」

○円覚―臨済宗円覚寺派の本山。山号瑞鹿山。鎌倉五山の第二位。誠拙は中興開

山となっている。○釣語—索語とも。師が弟子の見解・力量をためすために示す問語。○前版寮—禪堂の住持の居所。隱寮を指す。○秉私—住持が私子を取り説法する。○跛脚老将—雲門文偃（八六四—九四九）のこと。睦州に参じた際、扉に足をはさまれ、その時発した声で大悟した。しかし、足はびつことなり「跛脚子」と言われた。○紅旗—五祖法演が雲門宗を評して「紅旗閃爍」と言った。雲門の宗風。○奪鼓—「奪」は雲門宗の八要の一。「鼓」は住持が説法する時に打つ。住持となるもの。○参—この語に参じてみよ。

二 提綱。「一手独拍、崩崖裂石。直に須らく自らの本源に達すべし。」

切に忌む。他の腕力を認むることを。半輪の月弓、方池の水を掬す。俯して観、仰いで観る。数片の雲、五更の窓に摘む。今夕何が夕ぞ。会するときは、則ち虚空。あなたが敵くに信かす。否なるときは、則ち華山、我に譬からる。止々不須説。白雲和尚、黄鶴樓を挙倒す。密々風を通ぜず。金粟如来、妙喜国を断取す。爰を以て指を按じ、光を発し、賊の与に梯を過す。臂を断つて髓を得。羊を牽いて壁を納る。」裡者に到って上方の木上座、前席に突出して曰く、「恁麼の説話謂つ可し。金圈栗棘、只だ是れ、人の檢得する無し。如何んぞ、別に一路を轉じ箇の消息を通じ去らざる。」卓一下して云く、「往来、人に逢わざれば、長歌楚天碧なり。」

○提綱—大綱をひっさげる意。重要な点をあげる。○切忌—絶対に避けたい。を最もいましめる。○五更—夕暮れから夜明けまでの五区分。夜番がかわるので「更」という。○華山—五岳の一。○遭—らる。せらる。受身の助字。○止止不須説—『法華經』『方便品』の語。言葉の表詮の及ばない境地を言う語。

○白雲和尚—白雲守端（一一二五—一二〇七）臨済宗楊岐派。楊岐方会に参じ、その法を嗣ぐ。○拳倒黄鶴樓—白雲が「臨済三頓棒」につけた頌。「一拳に拳倒す黄鶴樓云々」『五家正宗贊』に出ず。すべてを掃尽するはたらき。○密々—細かいさま。しげっているさま。○金粟如来—維摩居士の前身とされる如来。○妙喜国—維摩の住する所。○按指発光—『五家正宗贊』の白雲章に出づ「我が指を按ずるが如き、海印光を発つ」とある。○与賊過梯—賊のためにはしごをかけた。法を求むる真剣さ。○牽羊納壁—自由豁達なはたらき。羊は前に進むことばかりにつとめる。○者裡—ここ。

三 復た挙す。「瀉山、仰山の方丈の外従り過るを見る。両手を以てて拳を握り、相い交えて之に示す。仰山便ち女人拜を作す。常照国師拈じて云く、『仰山の拜処、若し、更に深きことを放さば、瀉山両箇の拳頭、甚れの處に向つてか安著せん』と。大小ぞ、國師 彼の強を助け、他の弱を仰す。秉拂の上座は、鼠を以て璞と為し、玉を以て鵠を抵てる。」

○瀉山—瀉山靈祐（七七—八五三）百丈を嗣ぐ。弟子仰山慧寂と共に禪風を拳提した。その法系を瀉仰宗という。○仰山—仰山慧寂（八〇三—八八七）瀉山を嗣ぐ。○女人拜—女人のする拜。「師坐次。仰山入来。師以両手相交示之。仰山作女人拜。師云如是如是。」T四七・五七九中。坐したまま拜をすること。○常照国師—無学祖元（円覚寺開山・一二二六—一二八六）臨済宗楊岐派。中国慶元府（浙江省）で生まれる。無準師範の法嗣。北条時宗の請によって来朝し、円覚寺開山となる。○抵—あてはめる。

四 丙午、正旦、受業の院に在って陞座。

拈拄杖して云く、「堯風蕩々、舜日熙々、佛祖出興し、人天輻湊す。」卓一下して云く「二三の同社、還って会すや。今年の春を以って、去年の春を以って、去年の春に擬すこと莫れ。去年の春は、柳、眉を舒べ、今年の春は、花、顔を開く。依稀彷彿、誰が緇素を弁ず。楞上座、些の方便有りと雖ども、告報し去ることを要せず。何んが故ぞ。」良久して云く、「溪辺の老婆子、恐らくは、旧時の名を喚ばん。」

○丙午—天明六年（一七八六）師四十一才○陞座—請により、師家が説法で高座に登ること。○堯風蕩々—堯風とは、堯帝の仁徳が天下にゆきわたったこと。蕩々はおだやかなさま。○舜日熙々—舜日は、舜帝の仁徳が天下にゆきわたったこと。熙々とは、和らぎ楽しむさま。○輻湊—物事が四方から集まること。○依稀彷彿—ともによく似ているさま。○緇素—黒衣と白衣。僧と俗人。○良久—しばしの間。無言のさまをいう。○溪辺の老婆子云々—馬祖道一の語。

五 復た挙す。「大智禪師、改旦の偈に云く、『新年の佛法、如何んと問えば、口を開いて他に説示することを須いず。露出す、東君、真の面目、春風吹き綻ぶ、臘梅花。』大智自ら謂えり。『坐、太平を致す』と。殊に知らず、當面に蹉過することを。楞上座、幸に、自ら可憐生、対するに干戈を以ってせず。」

○大智禪師—（一二九〇—一三六六）曹洞宗。加賀大慈寺の寒巖義尹について出家。南浦・釈運に参じ、大乗寺の瑩山の門に入る。後、東明に参じ、渡海して、古林・雲外・中峰・無見などを歴参。帰国し、再び瑩山に謁し、のち明峰素哲を嗣ぐ。○偈云—『大智禪師偈頌』一卷に出づ。偈頌二二九首より成る。古来より

宗乗の一部として詩偈の指南書として重用されている。○説示—ときしめず。

○東君—日、太陽。○蹉過—時機を逸してしまふ。すれちがってしまふ。○可憐生—愛すべきもの、また、大変かわいそう。○干戈—戦争。武器の総称。

六 濃州、宗敦寺半夏小参、〈物先禪師に代る〉

釣語、「世尊、半座を分けて、我をして一枝を拈ぜ使む。満堂の迦葉子、切に忌む。両眉を舒ぶることを。参。」

○宗郭寺—理妙心寺派・岐阜県惠那郡。○半夏—夏安居三ヶ月の中間の日。○小参—方丈で学人が住持より親しく法を受けること。家君・家教とも。○半座—釈尊が迦葉に半座を分った故事より、住持に代わり首座が説法すること。○迦葉子—摩訶迦葉。仏十大弟子の第一。○我拈一枝—「拈華微笑」の話をうけた語。

七 提綱。「諸佛の法印、人縦り得るに匪ず。纔かに、思惟に涉れば、

箭、新羅を過ぐ。如何んと擬問すれば、口、荊棘を生ず。露堂々。朱点日の如く、初めより所詮無し。孤迥々。文彩天に耀り、誰が云う、不識と。豈に、雪、水に於き、泥に於けるのみならん。又、是れ南に現じ、北に現ず。衲僧の手裡に有るや。也た、一塵より経卷三千を出す。宗師の臂頭に挂けるや。也た、一枚に須彌百億を納る。是の故に、多福の一叢竹、曲々斜々、風に吹か被る。少林二株の桂、枝々葉々、月色を帯ぶ。」正与麼の時、上方の木上座、忽然として座側に勃起して云く、「恁麼の説話、縦令、曲直を隠さざるも未だ免れず。揚有り柳有り。何んぞ、法社の規則と為すに堪えん。即今、別に、一点の氣力を存せず。如何んぞ、諸大徳に告報し去らん。」卓一下して云く、「立ちて門に中ら

ず、行きて闕を履まず。」

○法印—仏法のしるし。○箭過新羅—極めて迅速でその落処が分らないこと。
『碧巖録』第一則にあり。○擬問—質問しようとする。○荊棘—いばら。障害になるもの。紛糾した事態のたとえ。○露堂々—全体がはつきりと顯われて、そのさまが見るからに立派なこと。○所詮—つまるところ。帰するところ。○孤迥々—広大で深遠なさま。○文彩—いろどり、美しさ、文章や著述のりっぱさ。○不識—達磨と梁の武帝との問答の語『碧巖録』第一則に出づ。○宗師—宗旨を体得して万人の師範となることのできる学徳兼備の高僧。○少林二株桂—『伝灯録』「菩提達磨章」に出づ。般若多羅が達磨の得法した折、将来、達磨の禅風が隆盛になることを予言した語。○正与麼時—まさにその時のこと。○恁麼—そのように、このように。○縦令—たとい。○闕—しきい。

八 復た挙す。「僧、趙州に問う。『狗子に還つて佛性有りや、也た無しや。』州云く、『無。』只箇の話頭、南泉の猫兒と錙鉢を争う。惜しいかな。箇の僧、問端莽鹵、還つて、趙州をして名模し去ら使む。樗上座は然らず。」卓一下して云く、「驢、井を視る。井、驢を視る。」

○僧問趙州云々—『無門関』第一則に出づ。古来より、「趙州無字」として参禅者の初関の公案としてよく用いられている。○南泉猫兒—南泉斬猫として『碧巖・無門関』に出づ。南泉と莽州との問答。○錙鉢—めかたが明らかで、いささかもごまかしがきかないこと。(斤両錙鉢)○拙確—でたらめにやる。がさつに行う。○驢視井云々—見る方も見られる方も共に無心であること。

九 壬戌 正旦、正統院に就いて陞座。

拈拄杖して云く、「年頭の佛法、旧無く新無し。祖師の巴鼻、疎有り親

有り。以至、去年の梅、今歳の柳、北枝は雪を帯び、南枝は春を漏らす。喝。歴然として、主賓を分ける。」卓一下して云く、「乾坤一王化、便ち奏す。万年歛。佛法、若し相い似たらば、争でか、余雪の寒きに勝えん。」

○正統院—現円覚寺僧堂。○拄杖—法を説く時に道具として用いる。○巴鼻—つかまへどころ。根拠。○卓一下—卓子(机)を一度打つこと。○王化—国王の徳化。君主の治世。

十 再住円覚

釣語。「第一義諦、閃電猶お遅し。槌下に首を回らすも、也た、是れ憨痴。参。」

十一 提綱「妙莊嚴路、電光も通ずること罔し。果然として前に在り、後に在り。切に忌む。西に向い、東に向うことを。衣鉢の為に来るに非ず。株を守つて兎を待ち、舟を刻んで劔を求む。語黙を將つて対せず。影を畏れて日に走り、耳を掩つて鐘を竊む。其れ、或は、下士笑うと謂わば、早已に、孔徳容を見る。徐に行きて踏断す流水の声。星殞ちて雨の如し。一超直入、如來地、鷗鳥風に当る。便ち見る。麻谷の女人拜、也た、是れ葛陂、竹杖の龍。」這裡に到つて室内の木居士、双瞳を怒らして曰く、「新長老、魔宮虎穴を揮わず。向上宗乗を挙げず。只だ是れ席を相、令を打し功有る者を待つ。今日、国の為に開堂説法、何ぞ、円の覺の海に遊び、華封の祝を為さざる。」卓一下して云く、「千金、禹膳に登り、万寿、堯鐘を献ず。」

○第一義諦—窮極の真理。○閃電—速いこと。○樋下—上堂の時などに打いて大衆に告報する法具の一。○敢痴—おろかももの。○衣鉢—仏法、仏道、伝法のあかし。○守株待兎—『韓非子』に出づ。古い習慣を守って融通のきかないこと。

○刻舟求劍—『呂氏春秋』に出づ。物事の移り変わりを知らぬこと。○不將語默對—口を開くことと閉じること。○下士笑—『老子』に出づ。「下士聞道。大笑之。」おろかな人。○孔德容—『老子』に出づ。老子の唱えた虚無の道德。一説には大道のこと。○徐行踏断云々—自己を忘れてそのものになりきること。『碧巖錄』に出づ。○一超直入云々—『證道歌』に出づ。○麻谷女人拜—『伝灯録』八・「南泉普願章」に出づ。○葛陂竹杖龍—自在転変のはたらき『祖庭事苑』五に出づ。○華封祝—華の封人が堯に寿、福、多男子の三事をもって祝福したが、堯はこれを辞退したという故事。『莊子』「天地」に出づ。

十二 復た挙す。「宝寿開堂、三聖、一僧を推出す。宝寿の前に宝寿在り。便ち、其の僧を打つ。三聖曰く、『長老、若し、恁麼に人の為にせば、鎮州一城の人の眼を瞎却すること在れ。』正統国師、拈じて曰く、『三聖、佛面に向つて金を剃ぎ、他の宝寿多少の光彩を添え、真如が拄杖、也た、多きことを較べず。只だ是れ、人の喫することを解する無し』と。宝寿、三聖の二大老、穀、賤しき時、価を増して糶し、国師、貴き時、価いを減じて、之を糶す。新田寛は然らず。露柱燈籠、彭八刺札。」

○宝寿開堂—宝寿二世和尚の開堂における三聖慧然の作略についての公案。○三聖—三聖慧然（唐の人）臨濟宗。三聖院に住す。○鎮州—河北省西部の正定県一帯。臨濟宗は、この地を中心に栄えた。○正統国師—円覺寺開山、仏光国師、無

学祖元。○新田寛—大用国師、誠拙周樸。○露柱燈籠—そのものがそのものとして現成している。○彭八刺札—鼓の擬音語。

十三 結制小参

釣語。「拈拄杖して云く、拄杖頭辺、選仏場。開く三々前、三々後。」卓一下して云く、「妨げず。心空及第し來れ。参。」

○選仏場—僧堂、禪堂、坐堂の異称。○三三前—「文殊前後三三」牛頭法融の嗣、無著文喜が五台山に遊んだ時の文殊との問答。『碧巖錄』に出づ。

十四 提綱

「直指堂上、直指人心、豈に、後語無からんや。留めて少林に在り。築着、礪着、切に忌む、沈吟することを。這裡に到つて、破草鞋。古藤杖。眼突々。口闍々。鳴伊、鳴伊。何等の面觜ぞ。已に、杜鵑、別岑に叫ば被る。」

○直指—そのものをさし示す。○直指人心—人の心そのものを直指する。「直指人心見性成佛」として用いられる。この句は『伝心法要』が最初と言われている。○築着礪着—行履が自由自在でとられるものないこと。○破草鞋—何の役にもたないこと。○藤杖—拄杖のこと。○突々—つきだす。○闍々—おだやかに人と論争するさま。○鳴伊—ことばの音。○面觜—くちばし。○杜鵑—ほととぎす。

十五 結制上堂

拈拄杖して云く、「瑞峰が拄杖、此の説話を会す。」卓一下して云く、「略似たり。汝が爲に、證明するを。切に忌む。衆を出でて礼拝すること。徳嶠、棒頭眼有り。懺懺すれども、也た、知らず。趙州の唇上、

光を發す。胡為ぞ、錯って敗を納る。豈に、只だ、古仏の家風のみならんや。試みに道へ。何人の境界ぞ。興化、好く打つ。克賓、此の保社に入らず。黄檗老婆、大愚、何んぞ、此の紹介に堪えん。肋下三拳、生す可し、生す可からず。罰錢、五貫、殺す可し、殺す可からず。」牀角白拂子、烏藤子に撞著して、便ち云く、「如上の說話、大いに、五須彌を一芥に納るに似たり。是は則ち是。未だ、他の爐鞴を出ること能わず。何んが故ぞ。暮春には、春服、既に成らんぬ。冠者、五六人。童子、六七人。沂に浴し、舞雩に風し、詠じて歷らん。亦た、快ならざるや。」払一払して云く、「一生、常に苦節、三省、詎ぞ、恠を行わん。」

○瑞峰―田覺寺の山号、瑞鹿山の山々。○趙州―趙州從諗（七七八～八九七）幼にして出家、南泉普願のもとで契悟す。歴参のち、趙州（河北省）觀音院で独自の禪を宣揚した。世寿百二十才。○唇上發光―趙州の家風を言った語。○古佛―趙州のこと。○興化云々―興化存獎（八三〇～八八八）が弟子の克賓を發憤させるために用いた活手段。「克賓出院」と言い、『五燈會元』『興化存獎章』に出づ。○黄檗―黄檗希運（不詳）福建省の人。百丈を嗣ぐ。弟子に臨済がいる。○老婆―老婆親切のこと。○大愚―臨済義玄を接化した人物。帰宗智常を嗣ぐ。接化については『臨済録』に出づ。○肋下三拳―臨済が大愚のもとで悟った時、大愚の脇腹を三度ついたこと。○烏藤―藤の杖。烏拄杖とも。○納五須彌云々―大小広狭自在のこと。○爐鞴―師家が弟子をきたえる道場のこと。○舞雩―あまごいをする。○三省―『論語』『学而編』に出づ。「曾子曰、吾日三省吾身。」

十六 謝秉弘上堂。

「三日以前、三人の頭首、秉弘一場、三人参請。優無く、劣無し。三人

三行、短有り、長有り。却って、臨済門下、兩堂首座、齊り一喝を下し、賓主歴然なりや、也た、無しやと問うに到って、鼎州書記、衆前に突出し、大海の硯、須彌の筆、虚空裡に向って大書して云く、『賓主歴然』と。瑞峰忍俊不禁、汝諸人の為に、歴然底の巴鼻を施呈し去らん。」払一払、喝一喝して「若し、様に依って胡蘆を尽くと謂わば、未だ全く、肯をす可からず。」

○参請―弟子が師について問を發し、師の教えを受ける。○大海硯云々―五祖法演の示衆に「虚空為紙、大海為硯、須彌為筆、如何書得祖師西来五字。」とある。『五祖録』T 47・六五三b。○臨済門下云々―『臨済録』『上堂』に出づ。○賓主歴然―臨―済義玄の語。『臨済録』に出づ。兩者はどこまでも兩者であり独立の存在である。○忍俊不禁―内に含み蔵しているものがあらわれ出るのをこらえかねること。○胡蘆―轉身自在の意。

十七 退院上堂

拈拄杖して云く、「住せんと欲するや。千山、霜飛び、葉の膝を擁する無し。去らんと欲するや。五台、路滑らかなり。這の勘婆を奈んせん。趙州老漢、你を欺くに心無し。南陽老來って他を誑さんと擬欲す。阿刺々、阿呵々、布鼓三聲、木人悲泣し、藤杖一卓、石女吟哦す。」卓一下して云く、「末世の比丘慚愧多し。百年の光景、夢中に過ぐ。大家、昨日住山の賀、又、是れ今朝、離別の歌。」

○五台路云々―『無門関』趙州從諗の作略。『趙州勘婆』の公案。○南陽―南陽慧忠（？～七二五）六祖慧能の法を嗣ぐ。○布鼓―見せかけだけで、実力のない

もの。○木人―思量分別を超えた境涯。「石女」と連用する。○吟哦―声をあげて詩歌をうたう。

十八 熊野の山、祥泉禪寺、再建陞座。

釣語。「文化丙子、八月。念三、仏々祖々、争でか、対談を容れん。参。」○熊野山祥泉禪寺―神奈川県。現建長寺派。○文化丙子―一八一六年。○念三―二十三日。念は二十に通ず。○佛々祖々―仏陀と祖師、仏祖のこと。

十九 提綱。「斤斧、工を鳩め、雲月、功を成ず。便ち見る。方丈走つて、仏殿裡に穩坐し、仏殿走つて、方丈の中に合掌す。諸天歡喜し、不徹列聖、聞見同風、祥泉、千仞に湧き、能野、一峰に聳え、全く是れ和尚中興、徳有り。更に祈る。檀那、外護窮り無からんことを。」忽ち、箇の漢、又手して座前に有り。云く、「和尚の説話、是は則ち是、只だ是。西を呼んで東と為すに似たり。何を以ってか、火盜潜消し、仏法興隆し去ることを得ん。」擊拈子して云く、「無業一生莫妄想、瑞巖只だ喚ぶ、主人公。」

○無業―商州（陝西省）に生まれる。（七六〇～八二二）。馬祖道一に参じ心印を受ける。諸聖地を徧参し、後、開元寺に住す。○莫妄想―唐代頃から盛んに用いられた。汾州無業禪師は、学人の問いに對し、常に「莫妄想」と答えた。妄念することなかれ。○瑞―巖唐末、閩越（福建省）の人。巖頭全大歳に参じて嗣法。毎日、自ら「主人公」と喚び、自ら答えていた。○主人公―『無門関』十二則「瑞巖主人」に出づ。

二〇 復た挙す。「賢于長者、一莖草を挿して云く、『梵刹を建て了る』と。世尊云く、『鶯子の智に勝れり』と。世尊、口を開いて合すことを

知らず。然も、是の如くなりと雖ども、水は竹邊自り流出して冷やかに、風は花裡従り過ぎ來つて香し。」

○賢于長者云々―『從容錄』四則「世尊指地」に出づ。いたる所、梵刹であることを示した。○梵刹―清浄なる国土。寺院、佛寺のこと。○鶯子―舍利弗のこと。佛十大弟子、智慧第一といわれる。○水自竹辺云々―本分現成の妙趣。『禅林類聚』八に出づ。

法語

二一 聴松軒の偈を評して、以って澄禪人に餞す。

聴松軒とは、巨山、賓客を引いて、相い接するの処なり。病僧、間暇無事。偶此を賦して、法喜、禅悦の食に充つ。時に、澄禪人來つて暇を乞う。尋ねて曰く、「之を写して以って、帰郷に餞せよ」と。因つて、句毎に、數語を雜え加え、略、管見を陳ぶ。全く、是れ一撃齊中の家醜、敢えて、別人に挙似すること莫れ。夫れ、蛟幹、虬枝、好風を弄す。蓋し意と語と、未だ善を尽さずと雖ども、聴松の面目、一句に頌尽し了る。苟くも、枯松、般若を談じ、幽鳥、真如を弄する解会を為さば、則ち、謂わゆる、賊を認めて子と為すは必せり。這裡に到つて進むに、宝所無く、退くに、線路無し。甚んに因つてか、還つて、祝融、峰下、雷同せず」と。乳峰、曾つて云く、「一と去却し、七と拈得す。上下、四羅、等匹無し。豈に、是れ者箇の時節ならんや。」病僧余才無しと雖ども、別に、生涯を立つ。便ち道う。軒に當つて、忽ち、濤声の起る有り。一喝は、三日の響に何如ん。只だ、箇の怒濤、耳辺に突起し來る。洞山、之を無中に路有り、塵埃を出づと謂う。有般は、還つて道う。『山

河大地、尽く、琴声を為す』と。又、是れ耳を掩って鈴を偷む。愚にあ
らざれば、則ち狂。且く道え。一喝、耳聾、是れ什麼の話欄ぞ。洞山、
又、曰く、『人々、尽く常流を出さんと欲す。』折合、終に、炭裡に帰っ
て坐す。亦た、只だ、毒を以って毒を攻むる者なり。切に忌むこと莫
れ。当路の筭を除かざることを要す。君が此に來って立つこと須叟なら
んことを。澄禪澄禪、我れ再來を待つ。汝、期を後すること莫れ。

○管見—自己の見解を卑下していること。○家醜—宗風のこと。○枯松談云々—
『人天眼目』に出づ。松風鳥語みな法を説く。○認賊為子—『伝灯録』「慧忠国
師広録」に出づ。○乳峰—雪竇山の別名。○去却—拈得七云々—『碧巖録』六則
に出づ。一つを除いたと思えばすぐあとから出てくること。○一喝云々—一喝で
心意識分別作用がやみ、鼓膜が破れ、三日間何も聞こえないようになる。百丈が
馬祖のもとで大悟を得た時の故事がある。○洞山—洞山良价（八〇七—八六九）
幼にして出家。南泉普願・潯山靈祐等に参じ、後、雲巖曇晟のもとで大悟し、雲
巖を嗣ぐ。後、曹洞宗の高祖と仰がれる。○無中有路云々—洞山五位の正中來に
対する曹山の逐位頌。○掩耳偷鈴—『淮南子』「説山訓」に出づ。かくしている
つもりでもすべて露出している。○話偽—話の種、話の材料。○人々尽欲—『洞
山五位頌』の内、「兼中到」の頌に出づ。○以毒攻毒—『普灯録』に出づ。毒を
消すために他の毒を用いる。○須臾—ごくわずかな時間。

二二 道禪人に示す。

夫れ、禪は、我が宗の大綱為り。其の余の持戒、作福、礼拝、看経は、
猶を衆目のごとし。苟も、意を縦せば、則ち、生死、苦楽、衣食、名利の
間に混在す。決して道を成ること能わず。世尊云く、「心を一处に制せ

ば、事として弁ぜざること無し。」此れ即ち是れ老胡の謂う所
の直指人心、見性成仏。深く信する者は、成仏立時に在り。肯て信ぜ
ざる者は、徒に勞して益無きのみ。道禪、道禪、須らく、進退策励すべ
し。

○世尊云々—『佛遺教経』に出づ。○老胡—釈迦、又、古佛のこと。○直指人
心見性成仏—『伝心法要』に出づ。○進退—起居動作の意。

二三 乙卯、晩秋、竹禪人、周州に帰るを送る。

世尊拈華、達磨分髓、衲子面前、什麼の繫驢橛にか当らん。竹禪人、帰
郷の念有り。法語を需む紙を出して、既に是れ東西。二大士、尚を是の
如し。山僧、箇の什麼をか道わん。縦令、横説、豎説するも、亦た、只
だ是れ一箇の繫驢橛子のみ。青霜、黄葉、萬里、是れ秋。東関、未だ出
さず。早く西周に到る。咄。果然として繫驢橛上に、更に。繫驢橛子を
添え得たり。

○乙卯—寛政七年・一七九五年○世尊拈華—『無門関』六則に出づ。○達磨分髓
—『達磨皮肉骨髓』と言ひ『歴代法宝記』以後の資料に記される。髓を得たの
は、二祖となった慧可である。○繫驢橛—ありふれたもの。なんの役にもたな
いもの。○東西二大士—印度の釈迦、中国の達磨。

二四 己巳 仲春、黙侍者、郷に還るを送る。

古人云く、「身口意清浄、是れを仏出世と名づく。身口意不清浄、是れ
を仏滅度と名づく。」楞上座、著語して云く、「父母、親に非ず。何にか
者か是れ親。」黙侍者、郷信を得て帰る。因って、此の両句を挙げて以

つて、途中鞭策と為す。今時、叢林、此れ等の語に類するを以て輕忽の会を為す者、少なからずと為さず。默侍者、謹んで他の瞞を受くること莫れ。速かに、家山に到って、便ち看よ。老僧、什麼に因ってか、還って道う。「父母、親に非ず。何に者か是れ親。」咄。春寒、尚を在り、中善たり。

己巳—文化六年・一八〇九年。○古人云々—不明

○著語—本則および頌等の句の下につけ加える短評。○鞭策—むちうちをばげます。○輕忽之会—人に接するに礼を失するような行い。○善為—道中氣をつけよ。

二五 勢州、在六居士に答う。

客冬、華翰、披読数回、頃ろ、答を致さんと欲して、貴書の所在を失し、搜索するども得ず。因って、老拙、暗記する所を以て答えを作す。來問に曰く、「故人、友石、念佛を好む。」而して、我れ、念佛を好まざる者。箇の是れ通人分上の論なり。夫れ、好と不好と、是れ両頭の語。古人、之を心外に法を見ると謂う。拙老、面前、夢を説く可からず。智者在六、何んぞ、此の失有らんや。棋生、立長、曾って、一唱、彌陀号、即滅、無量罪の文。謂わく、「是の如く衆生に教えば、増す、造惡に長ずるのみ」と。老拙、説破して曰く、「他の唱号の時に當って、仏有ることを見ず。衆生有ることを見ず。何れかに。況んや、罪業をや。」立長、深く之を領す。昔、一遍上人の国詠に曰く、『唱れば、佛も鬼もなかりけり、南無阿彌陀佛の声ばかりして。』一禪者、座に在って失笑

す。上人、其の由を請う。禪者、末句に別して曰く、『唱れば佛も鬼もなかりけり、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛』と。上人歎喜し、而して、踊躍念佛す。所謂、踊躍念佛は、是れを濫觴と為す。恵む所の海草、甘美、言う可からず。春来、暄に向い、果して東行すや否や。企望に堪えず。

○客冬—冬が過ぎさること。○華翰—人の手紙の敬称。○企望—つま立ちして待ち望む。願い望む。○一遍上人—(二三九—二八九)時宗の開祖。世に遊行上人と稱している。世寿五十一才。明治一九年円照大師の号をたまう。

二六 円相を打して、檀侍者、武州宗建の請に応ずるを賀す。

古徳云く、『古人、往々に円相を打して、諸衲子に与え商量す。仰山下、最も多し。』徑山の国一、東海の澤庵。來相の中に向って一点を加う、亦た肯有るかな。檀上座、武州宗建の請に應じ、殊に來って辞を告ぐ。老僧、一大円相を写して、住山の賀を表す。知らず、意什麼れの処にか在る。道うことを見ずや。臨濟一日、衆に示して云く、『一人有り。途中に在って、家舎を離れず。一人有り。家舎を離れて、途中に在らず。那箇か、合に人天の供養を受くべき』と。檀上座、会と不会と。總に、他の圈圖を出ること能わず。老僧、別に一計有り。你が與に吐露せん。昨日、曾って、今日を將って期す。門を出で、倚って、秋に又思惟す。僧と為っては、只だ、合に、巖谷に居すべし。国土、筵中、甚だ、宜しからず。

文政己卯九月日、不顧庵主、誠拙

○古人—南陽慧忠が耽源庵真に授けた一円相の義を仰山慧寂が接化の手段として

用いた。円相六義。○仰山—仰山慧寂（八〇七—八八三）偽仰宗。十五才で出家。十七の時、二指を断って正法を求めることを誓い、律を学び、巖頭、石室、耽源等を歴参し、後に瀉山靈祐を嗣ぐ。世寿七十七才。○径山国—径山は、浙江省杭州。天目山の東北の峰で、天目山に通じるところから径山という。唐代天宝の初めに、国一法師、法欽が庵を結んで幽居した。○国一—法欽（七一四—七九二）鶴林玄素を嗣ぐ。径山派の初祖となっている。代宗より国一大師号と径山寺の名を賜る。○東海沢庵—沢庵宗彭（一五七三—一六四五）一凍紹滴を嗣ぐ。品川東海寺開山となる。柳生宗矩などの帰依を受く。法嗣を欠く。○臨濟一日云々—『臨濟録』「上堂」に出づ。○家舍—本家郷のこと。『法華經』「信解品」長者窮子のご故事より出づ。○文政己卯—一八一九年。○不顧庵—円覚寺退院の後、住した玉泉寺の北にあった小庵の名。

論

二七 唯一神道論

西天に仏有り。東土に儒有り。吾が朝、惟だ神、惟だ貴ぶ。各の其の土に長じ、其の道を貴ばずんば、人にして人に非ず。然して、佛と儒と吾が朝に俱行するは、何んぞや。蓋し、聖人の道、其の原を同ずればなり。也た、吾が神、苛しくも、東土、西天に行れば、則ち仏教と為し、儒教と為す。然るときは、則ち、儒仏、吾が朝に行わるも、亦た、復た是、の如きか。夫れ、是れ之を唯一神道と謂う。亦た、宜ならずや。

○西天—インド。○東土—中国。○儒—儒教。

二八 濃州、雲林寺、虚堂頌古会の箴

秋間、聚会、他無し。但だ、虚堂禪師、百則の頌古を評唱し、以って、禪師の深く、仏祖肺肝に入って、曲に、其の妙を尽すを知らしめんことを欲す。爾、諸人、切に、須らく時中、己に克し、肩を袒ぎ、力を竭すべし。其の妙、他従り得るにあらず。要す、自ら肯うに在り。若し、這の佳境に到ることを得るは、則ち、速かに来って、些の巴鼻を露わせ。怒罵呵咄、互いに、主伴と為らん。亦た樂しからずや。禪師、自ら跋して曰く、「楊雄、太玄を著して、乃ち云く、『世、我れを知らず。』」当に子雲というもの有って、復た生ずべし。此れ亦た、愧ずかしむこと無きの詞なり」と。凡そ、後に、辞を措き、言を立つ。只だ、其の理に当てんことを要す。龍山、還って、子雲なるもの有ること莫しや。無しや。在らば、則ち、虚堂、子雲に和して、常に、你等、諸人の面門従り出入す。未だ、證據せざる者は、看よ看よ。

寛政乙卯の秋、龍山の東軒に書す。

○箴—いましめを書いたもの。○雲林寺—不明

○虚堂頌古—虚堂智愚（一一八五—一二六九）。運庵普巖を嗣ぐ。虚堂の語録十卷中、卷五の頌古の部分は、よく叢林で用いられた。○克己—『虚堂録』に「克己従人」の語あり。自己の勝手氣儘を克服し、他に従っていく。○禪師自跋云々—『虚堂録』卷五「頌古」最後にある跋文。○寛政乙卯—一七九五年。○龍山—南禅寺の山号瑞龍山。

二九 南江山、雪安居の箴

諸菩薩子、此の山中に來って、這の什麼をか為さんと欲す。古徳の垂

誨、河沙に遍し。何んぞ、更に、余が言を待たん。凡そ、大小の叢林、自ら古規有り。別紙に書し、諸堂に掲示す。但だ、肯心を弁ぜよ。必ずしも、相い賺さざれ。

○南江山―不明

○雪安居―冬の結制のこと。冬安居とも。○垂誨―垂示教誨の略。師家が学人に教えをたれること。○古規―古くからある規矩・規則の意。

三十 仏日山、丈室の箴

古今、叢に主たる。林者、全く別路無し。惟だ道以って務と為すなり。二六時中、身を処す処、須らく、隠顯有る可からず。利道兼ね行う可からず。古人、之を兼ね行うこと能わざるに非ず。蓋し、其の勢い不可なればなり。身を処する処、苟くも、隠顯有るときは、則ち、聞見、疑って信ぜず。常住の歳計、悉く知事に付す。知事、人を闕けば、則ち、林下の檀越等に付して掌管せしむ。昔者、正法、始祖、花園帝の離宮へ住する日、一時、屋漏る。師、急に召して曰く、「器物を持ち来れ」と。一童、亟かに笊籬を持ち来る。師、大いに之を賞す。或は、篋桶を索め来る。師、叱って曰く、「者の鈍顚漢」と。又、普請、茶を摘む。次いて細雨下り、濺ぐ。師、知事に謂って曰く、「奈何んぞ。清衆を濡湿せん。」当に茶樹を伐り来り、庫下に就いて之を摘むべし。左之、右之、喜怒、常ならず。仏祖も、其の由縁を測ること無し。何すれぞ、也た、此の如くなる。惟道、以って務と為るに過ぎざるのみ。咄。杭州禪師の需に応じて書す。

○仏日山―西江寺（愛媛県宇和島）の山号。杭州克文の住持した寺。○丈室―住持の居室。方丈。○常住歳計―禪院の公有の金銭収支会計のこと。○知事―禪門寺院の運営をつかさどる責任ある役位。○正法始祖―正法妙心寺、開山、関山慧玄（一二七七―一三六〇）。大灯国師、宗峰妙超のもとで「雲門の関字」の公案で証明され、嗣法す。○花園帝離宮―現妙心寺の所。○杭州禪師―杭州克文（一七六〇―一八三一）七才で出家。月船、竺源等に参ず。世寿七十二。伊予西江寺、応竜禪黙の席を嗣ぐ。後、京都円福寺に住す。

銘

三一 頓写、法華経銘、並びに序。

夫れ、沙竭羅龍王の女、年、始めて八歳、一宝珠を世尊の座下に於て献じ、須叟の間に於て、便ち正覚を成ず。爾の時、疑って信ぜざる者、亦た微なからず。蓋し、外に向つて五障を見、劫数を求むること無し。豈に、疑いを其の間に容る可けんや。龍台院妙貞大師、将に逝かんとするの前一夕、預じめ、疾病の起つ可からざるを知つて、左右を顧て曰く、「此の行、茲に始り、茲に終る」と。嗚呼、斯の言至れり。嗚、須臾に正覚を成ずるのみに非ず。而も、臥榻を起たず。驀に、南方に遊戲し、宝珠を拈出し、人に与えて看過せしむるの活三昧なり。然も、是の如くなりと雖ども、即今、南方、什麼れの処にか在る。一筆に勾下す。七軸経銘に曰く。

三会の所説、七軸の金蓮、業を一日に終え、徳を萬年に累ね、唯だ、是れ、黙に宜し。玄を談することを許さず。生を絶し、死を絶す。聖に非ず、賢に非ず。且つ、大師に非ず。親しく、法筵に臨む。菩薩、後を擁

し、龍女、前に現ず。宝珠、掌に在り。何ん人の辺にか附す。咄。黄紅、紫翠、其の光、璨然。

○沙竭羅龍王―八大龍王の一。観音二十八部衆の一。地上に雨を降らす神として尊信される。『法華経』『提婆達多品』の龍女成に仏よる。○正覚―仏教の正しいさとり。○五障―修道上の五つのさわり。○臥榻―寝台、寝床。○三会―三度の大法会。諸仏が衆生を救うため三度開かれる説法の集会。○法筵―説法の席。○龍女―『法華経』『提婆達多品』に出づ。○宝珠在掌―「明珠在掌」と同じ。『法華経』『安樂行品』によってできた語。仏性は本来自己の中にある、他に求むべきものでない。

三三 法華塔の銘

諸仏出世、斯の経有るが為なり。春雲由々、秋水冷々。己に、火宅を出づ。豈に、林垵に処せんや。咄哉、鑿舌、過、見星に在り。

又、

三会の所説、早く、便して宜に落つ。石を聚め、字を写して、錯って、他に欺か被る。咄。花は、須らく、連夜に発くべし。曉風の吹を待つ莫れ。

○由々―ゆっくりするさま。○火宅―煩惱の多い衆生世間をいう。『法華経』『譬喩品』に出づ。○林垵―効外。○鑿舌―おしゃべりのこと。○見星―釈尊が明けの明星を見て悟った故事。

三三 奥州、竹貫山、広覚寺開山遠諱塔の銘

竹貫の山、廣覺の寺、仏祖、本位に帰するの日。恭しく惟れば、前の参

州の太宗、竹貫の城主、曾って、今の地を捨し、伽藍を建つ。雲山悦公を請して、以って、開山始祖と為す。実に、護法の城なり。爾来、年久しく、月深くして幾ばくと。無人の境と為る。偶、宝洲長老なるもの有り。此の山に上り、感慨、殊に深く、直ちに、一隻手を出して、全く、百癢を挙ぐ。即ち、是れを中興の祖と為す。機上座、乍住の日も、亦た、漏屋、敗椽、楊岐昔日の居に彷彿たり。乃ち、工を起して、殿堂、門廡、復た、觀を改むの時節、恰も、開祖五百年の遠諱に値う。因って、四衆を請して、以って、三日の仏事を為す。正に、是れ、開祖、中興の願海、深くして、今日に至る。機上座、木浮圖を造立し、余に就いて銘を乞う。銘に曰く、

五百年前、此の山無し、正当、今日、雲山を見る。雲山、頼に、機公が手を借りて、竹斧声収まる、竹貫山。喝。

○竹貫山広覚寺―福島県現妙心寺派。○参州太守竹貫―高貫、鷹貫とも書いた。地名は竹貫氏累代の城下で阿武隈山地南端、鮫川沿岸に位置する。○雲山悦公―広覚寺開山雲山智悦（不明）○宝洲長老、機上座―広覚寺歴代の人か。○楊岐云々―楊岐方会（九九三―一〇四六）の道場が老朽して雪霰が床に満るほどであったが、修造を許さず、古人の三衣一鉢、樹下一宿の修行をおもい、工夫弁道の重要性を示誨した因縁。○四衆―教団を構成する人、比丘、比丘尼等をさす。○浮図―仏寺、仏塔、卒塔婆を指す。

三四 薬師如来、開扉塔婆の銘。

願海、春開く。十二門。瑠璃照徹す。一乾坤。世尊、更に、延年の術有り。日夜、風に翻る續命幡。共に惟みれば、現坐道場、薬師瑠璃光如

来、觀世音菩薩、地藏王菩薩、同一慈心、同一受用。十二願に乘じ、三摩地従り、六趣生に入り、游戲、神通、應用、無邊、有病、無病、当処に解脱す。宜なるかな。因の中の本願、是の如し。故に、果上の殊勝も、亦た復た然り。昔、右大将、頼朝公、蛭島に遷居の日、竊かに、三島の神宮に詣し、懇に祈るは、百日百夜。世尊、薬師如来は、即ち、此の神の本地為り。故に、此の尊に歸向するなり。亦た復た、切なり。吁、至誠の感ずる所、遂に、霸柄を執つて、天下に号令す。公、其の徳に感じ、建久の間、周福禪寺を創建して以つて、世尊を安置し、永く、法の檀度と為る。今茲、甲寅の春、現住、珪宗座原、此の宝殿を開く。周楞をして宗乗を挙揚し、慶讃の佛事を為さしむ。加え、四來の六和僧を延請して、無遮の勝会を開く。共に、仏恩を報ぜんと欲す。希代の盛事、法門の光輝と謂つ可し。伏して願わくは、玄風を不墜に於て振い、奕葉、芳を流え、慧命を無窮に続き、千燈不夜ならんことを。

○薬師如来『薬師如来本願經』によれば、東方十恒河沙の仏土の外に淨瑠璃という世界があり、その土の仏が薬師瑠璃光如来である。○十二門―薬師十二大願といい、因位の時に、十二の大願を發して衆生を導いた。○十二願―薬師十二大願のこと。○三摩地―三昧のこと。心の統一。○六趣生―衆生の輪廻する六道の世界と發生の形態。○右大将頼朝公―源頼朝（二四七～二九九）鎌倉幕府初代の將軍。平治の乱の時伊豆に流されたが、後に挙兵し平氏を追討した。○三島神宮―三島市大宮町にある神社。○周福寺―三島市、現円覺寺派。○檀度―布施のこと。○甲寅―寛政六年、一七九四年。○座原―「座元」と書するが普通であるが、円覺寺は開山が「祖元」であり、その「元」を用いず「原」を用う。○六和僧―僧侶。僧伽の成員が相互に和合して敬愛するために実践する六種の法。○無

遮勝会―平等に財法二施を行ずる法会。○希代―世にもまれなこと。世にも珍しいこと。○奕葉―代々、累代。

三五 南禅寺僧堂鐘銘。

爐鑪を踢翻し、大器、始めて成る。他の豐嶺に倣うは、焉んぞ、霜に鳴ることを知らん。惟し凡、惟し聖。一撃一声、朝参暮請、月白く、風清し。洪音尽くること無く、永く、化城を鎮す。

○南禅寺―臨済宗南禅寺派の本山。寺格は京都五山の上。無関普門を開山とする。朝参暮請―朝夕、師家の堂奥に参じて親しく指導をうけること。化城―『法華經』の七喻の一。

三六 相州津久井県、善左衛門なる者、諸国名山、靈蹤、巡礼し畢るの

日、里人、石を立て、其の功を誌さんと欲し、余に銘を請う。銘に曰く、

身を芥裏に蔵し、歩を竿頭に進む。何等の面贅ぞ、六十余州。

○進歩竿頭―「百尺竿頭進一步」「無門関」に出づ。向上の境地より更に一步を進めて、無碍自在に大活動する。○六十余州―日本全土の古称。

三七 金剛山、正法寺、不動明王、開扇塔婆の銘

動にして、静ならず。にして動ならず。静動静並びに忘ず。是を不動明王と曰う。苟くも、動、不動の会を作さざれば、則ち爾り。不動は、真の不動に非ず。其の動き知らんと欲さば、当に、其の静を究むべし。其の静を知らんと欲さば、当に、其の動を究むべし。動なり、静なり。これを究め、これを窮め、到るや無究の処、果然として、一切所に遍ね

し。動靜ならざるは無し。爰に、大信者は、便ち正覺を成じ、小信者は、福寿延長を以つてなり。咄。

銘に曰く、

十劫道場不動尊、一毛頭上乾坤を定む。端無くも手中の劍を失却す。到る処、發願鉄面門。

○金剛山正法寺―山梨県。○不動明王―五大明王・八大明王の一。大日如來の応化身、一切の魔軍怨敵を滅ぼし、行者を擁護し、菩提を成ぜしめる明王尊。

三八 宝谷山、長福寺、殿鐘銘、並びに序

相州、愛甲郡、宝谷山、長福禪寺。故の住持、百川座元。海公、洪鐘を造らんと欲して、以つて、晨夕の仏事を為すも、物を果さざる故なり。其の徒、棹禪人、其の志を継ぎ、四方に縁化し、小鐘、一口不白に、功を全うす。勤めたりと謂つ可し。苟くも、器の大小、声の遠近を以つて、吾が海潮音を測る者は、実に、吾が徒に非ず。之を撃て、之を攻めよ。棹、踊躍して銘を求む。余笑つて、銘を作つて曰く、一口、倒に開く、時時、大いに吼う。諸仏、定より出で、群生、夢覺む。眼を將つて聞く底、何を以つて効を得る。干海に権輿し、之を継ぐ者は棹。

○宝谷山長福寺―神奈川県。現建長寺派、百川座原―長福寺十一世。○縁化―法縁勸化。○海潮音―觀世音菩薩の説法の声。鐘声をたとえていう。

三九 袖触松、香案の銘

棟梁を体と為し、袖触を名と為す。微風至らず、誰か、其の声を聴く。

○袖触松―不明

○香案―香炉台。○棟梁―重要な人物。

四十 華嶽寺、鐘の銘、並びに序

甲州郡内、日野の里、日月山華嶽禪寺、府城の東南二百里に在り。開山好祖自り以來、未だ曾つて、鳴鐘の仏事を為さず。是に於て、故の住持皇谷禪師、新たに、洪鐘を鑄つて以つて、晨昏の備を為さんと欲す。而して、果さずして示寂す。上足、日峰禪師、其の志を継ぐと雖ども、多病、力足らず。亦た物故す。見住、桂峰蜜公、四方に行化し、寒暑倦まず。其の功、三世にして、始めて成る。偉なるかな。正覺法王、談空の口を開き、一音演法す。劫石は、消する日有るも、洪音は、尽くる時無し。密公、遠く、鎌府に來つて銘を求む。銘に曰く、山有り、寺有り、只だ、洪鐘無し。朝暮、進退、儀容に難為なり。善いかな。華鯨、頓に鑄鎔を脱す。仏祖、等しく敬し、人天、齊しく恭す。皇谷に始り、桂峰に就る。其の功、誌す可し。月、青松に懸ける。其の徳、孤ならず。雪、玄冬を照す。大功、不宰、祖宗を恢くにせんことを要す。

○日月山華嶽寺―山梨県。現建長寺派。○皇谷禪師―不明。○日峰禪師―文化元年九月寂、九世以降の住持。○見住―現住に同じ。

○桂峰蜜公―不明○劫石有消日云々―『虛堂』録七に出づ。劫石は消する日があ

っても仏法は滅することがない。

四一 甲州郡内、縣八米村、象王山、龍泉寺、上梁の銘

山を象王と曰う。県大なるかな。故を革め、鼎に新たなり。寺を龍泉と曰う。徳至れるかな。雨を施し、雲を行わる。雷、諸天、能く擁護するのみにあらず。全く、是れ、檀那、功勲を立つ。仰いで冀わくは、単伝の禪を興隆し、万乗の君を祝延せんことを。

同鐘の銘、並びに序。

覺範洪公曰く、「梁の武帝、宝公の神力を仮りて、地獄の相を見る。問、何を以てか、之を救わん。」宝公曰く、「衆生の定業、即滅す可からず。唯だ、鐘声を聞けば、其の苦、暫く息むのみ。」武帝、是に於て、天下の仏廟に詔して鐘を撃つとき、当に、其の声を舒徐すべしと、以て、苦を停めんことを欲すればなり。甲の象山、実道寔公、余に告げて曰く、「我山、明和中、祝融の災有り。殿堂、鐘楼、尽く、皆な焼滅す。今、殿堂、纔かに成る。独り、未だ、洪鐘を作らざるを以て憂と為す。文化丁丑、化を四方に勸せ、其の功、再び成る。因って、銘有らんことを謂う。余曰く、「鐘声の功利、梁武宝公の所説、理、己に固然。吾、豈に、更に、喋せんや。」便ち、銘を為して曰く、衆生の大夢、一声洪鐘、天堂、地獄、其の蹤を見ず。雨、万壑に収り、日、高峰を照す。我れ聞くことは是の如し。喚んで甦と為すこと莫れ。

文化十五年五月朔、不顧の南軒に書す。現円覺誠拙

○象王山龍泉寺―山梨県。現建長寺派、象王山は現在蔵王山となっている。○覺

範洪公―覺範慧洪（一〇七二―一一二八）臨濟宗黄竜派。寂音尊者と称す。○梁武帝―南朝第一代皇帝（五〇二―五四九在位）善慧大士や宝誌らと交わって仏教に親しんだ。南朝仏教の極盛時代を画した人物である。○宝公―宝誌（四一八―五一四）達磨と武帝との問答で、達磨が帝のもとを去った後、帝に達磨は仏心印を伝える観音聖人であると言った人物である『碧巖録』一則を参照。○実道寔公―竜泉寺十九世天保五年七月寂。○明和―一七六四―一七七二。○文化丁丑―一八一七年。○文化十五年―一八一八年。○不顧南軒―補陀山玉泉寺（現円覺寺派）。

四二 水陸会塔婆の銘

琉璃殿上、無影樹下、潭北、湘南、花落ち水瀉ぐ。咄、將に謂えり。吾、爾に隠すと。此の地に、金二両無し。

○水陸会―水陸の衆生に食を施す法会。施餓鬼会のこと。○琉璃殿上―琉璃とは玉の名。すばらしい寺院のこと。

四三 猿橋、水陸会、塔婆の銘

生死有るが故に、迷悟有り。迷悟無きが故に生死無し。爰に、甲州、猿橋の下、溺死する者有り。駅の長、哀憐を以ての故に、卒堵波を建て、水陸会を修し、他の業障をして頓に、消滅せ使む。偈に曰く
白猿橋下、碧潭千尋、身を放って即死す。切に諱む、沈吟することを。
漸、智者は、重ねて説かず。痴人は、昼、金を攫む。

○猿橋―山梨県。○生死―有情の出生と死滅。○迷悟―輪廻転生の迷いと解脱涅槃の悟り。○卒堵波―日本では寺院の建物の中に取り入れられ、三重、五重の塔

となった。現在の塔婆とは異なる。

序

四四 正眼国師語録の序

生の極は、不生。生ずるときは、則ち、跡を絶す。滅の極は、不滅。滅するときは、則ち、現前す。生滅一貫、以って、吾が道を恢んにす。正眼国師、曾って、此の門を開いて、以って衆疑を決して、淵黙、雷声幾くか。五十年、其の徒、聞く所を集めて編するに、国字を以てす。今、也た、遠孫、微公道人、之を漢語に改む。若し、人、此の門に入得せば、道人の功、虚しく施さず。抑、亦た、其の堂に陞る可し。未だ、其の室に入ること許さず。

文化丁卯、夏五月、樗誠拙、巨峯の回春庵に書す。

○正眼国師—盤珪永琢（一二六二—一六九三）『大学』の「明德」について疑問を持ち、諸方に歴参し、後、大悟し不生禪を宣揚する。祖牛を嗣ぐ。○遠孫—法脈を継承する後世の児孫。○文化丁卯—一八〇七年。○巨峰回春庵—建長寺塔頭、玉山徳璇（一二五五—一三三四）を開山とする。

四五 三隱詩集索蹟の序

唐に三隱一獸有り。寒山と曰い、拾得と曰い、豊干と曰う。獸とは、則ち、虎なり。飢えれば、食を国清に偷み、飽けば、雲に天台に睡る。而して、其の睡を同じ、其の夢を異にする者は何んぞ。蓋し、譚語、同じからざれば、也た、大鼎老人、他の四睡に和して、更に、一夢を添う。題して、三隱詩集索蹟と曰う。証を引くこと、詳らかに備う。其の功勤

めたり。老人、一日、余に就いて、序引を請う。余、敢って辞せず。亦た、唯だ、古今の夢を原することを欲せず。要は、且つ、天下の人をして、夢の所在を知らしめるのみ。文化甲戌、大月、淋汗の日、相中の鹿門に寓する。誠拙叟、周樗。後に、一偈以て書いて曰く、晚来、湖上、魚を罟する、人、深く波光を窺うを、殺氣頻なり。急水江頭、一物無し。主客満船、笑、転た新たなり。

○三隱詩集索蹟—三卷大鼎撰『寒山詩索蹟』とも言う。○国清—浙江省、天台山仏隴峰の麓にあり、十刹中の第十位。隋の陽帝が天台智顗のために創建した天台宗の根本道場。○譚語—たわごと。とりとめのないことば。○大鼎老人—『三隱詩集索蹟』の撰者。○文化甲戌—一八一四年。○淋汗—夏の入浴。行水。

四六 関南集の序

法に定相無し。縁に遇わば、即ち、宗。獸淵禪師は、奥州、会津の人なり。恨を剣刃上に得、恨か剣刃上に復す。一恨一讎、何んぞ、曾って、定相有らん。遂に、乃ち、世の夢幻を観ん。薙髪にして僧と為る。郷里に在ることを愧ず。直に、複子を挟んで道を四方に問う。始め、月船古佛に謁し、既に西上して含旭老人を訪ね、嵯峨に於て入室の暇、好んで、禅月乳峰の偈語を読む。風花、雪月、樵唱、漁歌、凡そ、以って、詩吟の鼓吹と為るに足る者は、收拾して遺さず。久しく、之れ、自ら覺えず、佳境に入る。豈に、唯だ、縁に遇わば、即ち宗とするのみならんや。縁熟して住山、化、将に盛んならんとて示寂す。其の嗣、瓊巖老禅、編して、関南集と曰う。嗚乎。師、入道の機縁、大丈夫と謂つ可

し。法、尚、捨つる所有り。況んや、区々たる文字、何んぞ、必ずしも、功を要せん。若し、或は、之を剣刃上に求めるときは、則ち、万里崔州ならん。

○関南集—黙洲祖漸（一七四四—一七八八）の詩偈集。祖漸の法嗣、瓊巖祖珍編。○黙洲禪師—黙洲祖漸。初め東漸と称す。会津の人。月船、桂洲に参じ、後、良哉元明に参じ印可を受く。○月船古仏—月船禪慧（一七〇二—一七八一）北禅を嗣ぐ。（古月とも）永田の東輝庵に住す。物先海旭、誠拙周檣等の法嗣あり。○含旭老人—不明。○禅月乳峰偈語—『禅月集』十二卷月大師撰。と『雪竇頌古』一卷雪竇重顕撰。二書は禅門でよく用いられた。○万里崔州—遠いはての地。

四七 齋餘稿の序

禅者、文無し。文無きを以って其の文と為す。居士、友石、時雨亭の記を為す。辞理、通貫、旨趣、藉散、之を読まば、人意を快くするに足る。其の藤公の雅尚、及び、吾人と、即今見る所を叙するや。感懷、歴歴として、眉目の間に接するが若し。時雨亭、故黄門、定家卿、隱栖の処。今、尼寺と為す。厭離庵と曰う。予、一日、三三の道者を携え来て供に応ず。齋罷茶、罷めて、共に、偈言を説き、法喜禅悦の遊を為すなり。偈及び居士の記文を録し、三十余首を得たり。並びに以って、篇を為し、戯れに題して、齋餘稿と曰う。偶然の作、一時の適を取るに在り。乃ち、所謂、無文の文、禅者愧じず。

○齋餘稿—不明

○時雨亭—厭離庵の境内にある。○定家卿—（一一六二—一二四一）鎌倉前期の歌人。○厭離庵—京都市内。臨濟宗天竜寺派。白隱の法嗣、靈源慧桃によって禅宗寺院となった。○法喜禅悦—仏道禅法に對して喜悅の信心を持つこと。

四八 佛国曆象編の序

円通律師、仏国曆象編を著し、既に成り、序を余に請う。余、固より、天文、曆術を知らず。只だ、仰いで、天を觀、俯して、地を察するのみ。序は、則ち、吾が分に非ざるなり。律師曰く、吾れ、所謂、不知を將って、世の無智の輩を曉して、而して無からんと。遺す所なり。嗚乎。律師の言や、至れり。象外に独歩して、象内に坐臥する的一転語なり。余、寧んぞ、語無からん。請の誠に、余が偈を聴け。曰く、普門の関楨子を撥転し、円通の境界、一時に開く。大家、若し、是れ躊躇し去らば、日月星辰、眼を刺し来る。

文政改元、中夏の日。

○仏国曆象編—五卷、円通述。仏教の經論中に散見する天文曆学の断片を輯録詳説したもの。○円通律師—（一七五四—一八三四）七才で出家し日蓮宗の寺に入る。後天台宗に転じ、江戸三縁山惠照律院で寂す。○一転語—一語で相手を悟らせる語。翻身させる一語。○撥転—転ずること。向上をめざして移り調えること。普門—衆生を等しく仏知見に開示悟入せしめる門。○関楨子—自身を自在に向上させる関鍵・機関。○躊躇—ためらう。ゆったりしたさま。○文政改元—一八一八年。

四九 栗棘蓬の序

物有り、天地に先つ。天地、初めて分れて、此の物有ること無し。是れ

以って、千仏万祖、求覓せんと擬欲すれども見ず。十八神変を尽せども、還って是れ模索、不著。端し無く、錯って、露柱に撞著し、眉間より大光明を放つ。夫れ、是れ、之を物先老人と謂う。見ずや。老人、八十二年、東倒、西播、爛泥裏に棘を布く。後來の衲子、親しく、透過し去ることを得れば、方に、始めて、叢林典刊を知らん。

文政己卯、夏、鎌倉府、鹿山主人、誠拙、謹しんで序す。

○栗棘蓬——二卷。物先海旭撰。禪訥編。物先は、東輝庵の月船に参じ、月江宗鈍に嗣法す。

○摸索不著——探り求めても、さぐり当てられない。○撞著露柱——目の前のむき出しの柱に打ち当る。明き盲を罵る語。○物先老人——物先海旭（一七三六—一八一七）八才で出家。長じて諸国に歴参。長松寺月江宗鈍を嗣ぐ。後、東輝庵に住す。晩年失明す。○文政己卯——文政二年。一八一九年。○鹿山——瑞鹿山、鎌倉円覚寺の山号。

記

五十 一撃齋の記

万年の山為る、絶壁、峻崖、環るに松竹を以ってし、鳥道、僅かに通ず。其の中に巍然たる者は、常照国師の霊塔なり。是に於て、蹤を香巖に慕い、我と志を同じくし、塵を塔下に掃う者は、共に、相い謀る。石を拽き、土を搬んで、遂に、一僧堂を築く。未だ、古の如くなること能わず。禅規、濶備わる。乙巳の夏、更に、茅を誅めて、小廬を其の傍に結ぶ。扁して、一撃と曰う。昔者、香巖、南陽の塔下に於て、撃竹一聲、豁然大悟して、乃ち、偈を述べて曰く、一撃、所知を忘す。更に、

修治を仮らず。今、我れ、榻を南窓に移し、簾を東軒に開き、香を焚いて黙坐し、履を縦し、藜を抜き、塔下に経行す。仰いで山月を見、俯して巖泉を聴く。而して、耳目有ることを知らず。而して、山の水の美、耳目の間に昭然たり。彼の香巖の泣いて瀉山を辞し、南陽に抵るが如きに至りては、固より、泛泛の能く比する所に非ず。然も、能く比すること無しと雖ども、已に、是れ、石を曳いて土を搬ぶ。也た、是れ何ん人ぞ。先哲の言併せ書して、新齋に掲ぐ。新たに、茅齋を築く。八九椽、軒に当って竹を栽ゆ。又、隣に堪えたり。寧んぞ、瓦礫を將って、重ねて相い触れん。恐らくは、香巖飯後の眠を被らん。

○一撃齋——現円覚寺僧堂の隠寮のもととなった所。「一撃忘所知」の「一撃」をうけている。○万年——万年山、正統院、現円覚寺僧堂。○巍然——たかくそびえている。○常照国師——円覚寺開山無学祖元。仏光国師。○香巖云々——香巖智閑（？—八九八）百丈に参じ、後、瀉山霊祐に参ず。瀉山に父母未生以前の一句を詰問され答えられず、瀉山のもとを辞して、南陽慧忠の塔に庵居していた。一日掃除をしていて、はかれた石が竹にあたる音を聞いて大悟し、瀉山を嗣ぐ。○禅規——禅門の規矩。○乙巳——天明五年、一七八五年。昔者云々——「香巖撃竹」「大慧正法眼藏」「会要」「会元」などに出づ。○泛々——うかびただようさま。落ち着きのないさま。

五一 隠山禅師来訪の記

古の俊傑、旨を領するの後、一び山に入るときは、則ち、杳として消息無し。西山、隠山の二老は、傑の又傑なる者なり。我に故人有り。自ら隠山と号す。曾って、余と同じく武溪禅師の室に入る。所謂、毒淫に中

る者なり。禪師、世を去ること既に久し。因って来って塔下の塵を掃い、且つ、故旧の門を敲いて、以って、餘毒を嘆かんと欲す。亦た、樂しからずや。故に、春秋兩回、余が草庵を訪ね、一言、曾って、世諦に涉らず。唯だ、毒を以って毒を責むるのみ。其の隱山と号する所以んを問うに、乃ち曰く、「山に洞戸有り。以って、膝を容る可し。水に梅泉有り。以って、渴を歇む可し。豈に、古を以って今に擬する者ならんや。」余、曰く、「斯の言尽せり。」嗚乎、隱山、其れ復た生ずるか。今の叢林、往往、宗師と称する者、世と汚流す。言を忘れ、行を肆にし、竟に、五家の名器を取って戲論の具と為す。古を以って今に擬せんと欲すること、亦た、難しからずや。此に至って、故人、自若として答えず。乃ち、歌って曰わく、「滔滔たる武溪、一に何んぞ深き。鳥度らず。獸臨まず。」嗚乎、武溪毒淫深し。無用道人退くこと三舎して曰わく、「後、五百年、熊秀才というもの有って、再び、斯の言を記せん。吾れ何んぞ、焉に預らん。」

○隱山禪師—隱山惟琰（一七五四—一八一七）峨山慈禪を嗣ぐ。九才で出家。一
九才、月船禪慧に參ず。二六才の時、関西の高僧に歴參、後、峨山について蘊奥
を極む。世寿六四。正灯円照禪師と追諡される。○武溪禪師—月船禪慧（一七〇
二—一七八一）北禅道濟に投じて出家。北禅を嗣ぐ。（古月とも言われる）高乾
院に住し、後、東輝庵に退く。門下に物先・誠拙をいだす。○梅泉—隱山の住し
た美濃の梅泉寺を受けている。○五家—六祖慧能以下南岳より瀟仰宗・臨濟宗・
青原下より雲門宗・法眼宗・曹洞宗の五派に分かれた。○無用道人—誠拙周樗の
こと。○退三舎—相手をはばかって自分から退くこと。○熊秀才—人名。

五二 市貴菴の記

道者は山を愛す。俗物取愛の山に非ず。蓋し、境を奪うと、境に奪は被
るとなり。壬戌の秋、東都、小師、一三居士、書を贈って曰く、「近頃、
居を開闢地に卜し、転た、閑閑地を得たり。猶、未だ庵名有らず。名の
字という題せんことを乞う」と。余時に、七朝帝師の偈語を読む。偶、
市中買得たり。沃洲の山という一句を得たり。因って、市買を以って
需に応ず。若し、能く、箇の市買に住し得たるときは、則ち、絲竹、管
弦、一切の染塵、皆、是れ入道の機縁なり。否なるときは、則ち、縦
い、深山幽谷に居すとも、亦た、只だ、是れ世俗に混入するのみ。居
士、其れ、勉旃。

○市買菴—

○奪境云々—臨濟四料揀をうけた語。『臨濟錄』に出づ。○壬戌—享和二年。一
八〇二年。○閑々地—さわがしい所。○閑々地—しずかな所。○七朝帝師偈語—
夢窓疎石（一二七五—一三五一）の偈頌。『夢窓国師語錄』巻下にあり。○市中
買得云々—夢窓国師の偈頌「寓居聚落」と題する詩中に出づ。

五三 忘路亭の記

壬の申の春、小亭を補陀山の北嶺に構え、扁して、忘路亭と曰う。蓋
し、語を寒山に取り、意を来者に示さんと欲す。寒山曰く、十年帰るこ
とを得ざれば、来時の路を忘却す。古人、又、曰く、「心境、俱に忘ず。
又、是れ何物ぞ」と。夫れ、忘に、世間、出世の殊有り。心外に境を見、
境外に心を見、而して、心境、俱に忘ずるは、所謂、世間の忘なり。心

外に境無く、境外に心無く、而して、心境俱に忘ずるは、所謂、出世の忘なり。其の亭為るや。一梁四柱、方に、大に満たず。其の境為るや。

一見、便見、爾に隠すること無し。是に於て、乃ち、歎じて曰く、「善きかな。二師の言。」遂に、後の来者をして、心境、俱に忘ぜしむ。既に、是れ、心境俱に忘ず。忽ち、人有り。忘路亭を問わば、如何が、穌對せん。余時に、墨を磨し、筆を染め、謾に、一偈を題して曰く、「倒に、枯腸を把って抖擻する時、懷中、物の思惟に当たる無し。果然として、来歸の跡を失却し、禿髮の寒山、両岐に迷う。」

○忘路亭——不顧庵忘路亭と名づけられ、現在は建物は無く、額のみが玉泉寺に蔵される。○壬申——文化九年一八二二年。○補陀山之北嶺——補陀山玉泉寺（神奈川県）現円覺寺派。○寒山——唐代の僧と言われるが、伝説化し、實在の人物かは不明。○寒山曰云々——『寒山詩』に出づ。○枯腸——よい考えがわいてこない心のたとえ。○抖擻——あげる。

五四 牛糞庵の記

衡巖、瓚有り。西山に亭有り。無住を住と為し、無隠を隠と為す。主敬道人、茅を誅いて山に隠る。是れ親しく、二老の蹤跡を得たる。余、便ち、山を名づけて西山と曰う。庵に題するに、牛糞を以てす。若し、夫れ、牛糞爐頭、芋子の熟するを待つときは、則ち、三生、六十劫、直饒、直下に頭を回らし、去って、杳として消息無きも、未だ、免れず。背後に熊秀才有ることを。咄。更に、一偈を以て、其の意を證す。衡嶽、西山、両岐無し。白雲、明月、儘相宜し。如今、又、見

る。敬禪者。寒涕頤に交わる。芋の熟する時。

文化丁丑の中、夏、不顧庵主、誠拙書す。

○牛糞庵——不明

○衡嶽——五岳の一つ。○瓚——玉の一種。○牛糞云々——『碧巖錄』三四則、頌評の懶瓚和尚の故事による。○三生六十劫——小乗の聲聞が悟るまでに要する修行の時。非常に永い時間。『法眼禪師語錄』『碧巖錄』に出づ。○直饒——「たとい」であるけれども。○文化丁丑——一八一七年。

五五 蔭涼山、濟松禪寺、普光園の記

蔭涼の名山、濟松禪寺は、正保年間、祖心尼公、猷廟の台命を奉し、創建する所の一大刹なり。既に、勅諭、心印正傳禪師を洛の法山に請して、開山始祖と為す。法裔裔縁、山東に盛ること、殆ど、二百年、故の住山、賜紫、謙堂禪師、地を院の西北に卜して、普光園を創して、吠室羅、摩那耶大城に象らんと欲す。而して、其の功、果さずして履已に西す。孝子、潤叟瑄公、之を慨いて止まず。是に於て、朽壤を剝闢し、榛蕪を剪焚す。瓦礫を平らげて、疎林を出し、染流を浚して、清池を成す。巖徑、上下、石橋、以て度る。花木、繁榮、禽獸遣わさず。人をして塵区を別れて、仙寰を叩くの想有ら令む。嗚乎、天、普先を化して、此の地に現ずるか。抑、亦た、他方より飛来するか。乃ち、最勝殿を建て、多聞尊天を其の中に奉安す。香燈、課誦、長時断ぜず。専ら、佛法の興隆を禱る。蓋し、尊天は、万里、小路、藤房卿の、曾って、宝持する所なり。卿、出塵の日、之を下毛の長光禪刹に蔵す。事は別記に

詳らかにす。云く、余、幸に、今、其の殿に詣し、其の園に遊ぶときは、則ち、人天、交接し、両ながら相見を得るの時節に非ずして、何ぞ、謾りに、其の間に擬議すること莫れ、懿、夫れ、瑄公の孝徳、周樗、随喜に勝ず。謹んで、敢って辞を献じ、禪師の為に、寿万年を祝し、兼ねて、以って、園の落成を賀す。其の辞に曰く、

一株の大樹、天下の蔭涼、道、千古に合い、天、普光を開く。誰か、其の主を弁ず。常に、道場に坐す。你、纔に、心を挙すれば、雲、太陽を遮る。潤叟長老、此の遺芳を續ぐ。朝遊、夕処、唵嘯、彷徨、日日好日、時時、吉祥、祖胤止まず。寿福、疆無し。

文化丁丑、夏、五月、鹿山、不顧庵主、無用道人、謹んで撰し、併びに書す。

○済松禪寺―東京。現妙心寺派。○普光園―済松寺境内の庭園名。○正保年間―一六四四年―一六四八年。○祖心尼公―(一五九八―一九七五)江戸初期の尼僧。三代將軍家光の左右に侍す。のち公命により、武州稲田村に一字を建立した。これが済松寺である。○猷廟―三代將軍、徳川家光のこと。○台命―三公の命令のこと。○心印正伝禪師―水南法宿。法系では、応灯関の流れの中、甲斐恵林寺の快川紹喜の五代後にあり。○謙堂禪師―済松寺十一世謙堂文益。○潤叟瑄公―済松寺十二世潤叟文瑄。剗闢―きりひらく。○朽壤―くさってこわれる。○榛藪―雑草がしげりみだれる。○仙輿―仙人の住む処。○彷徨―あてもなくぶらぶら歩く。○文化丁丑―一八一七年。

五六 白雲庵、大明塔、上梁の記

文化十四年、丁丑の春、三月、白雲庵の主塔比丘、無隠座原、燈公、開

祖、東明禪師、大明塔の旧址に就いて、再び、祖龕を新たにす。自ら、材を聚め、工を鳩め、秋八月に到って、斧斤の声を収む。是に於て、燈公、開祖、自ら著す所の銘を出して、周樗をして、書写せしむ。其の銘に曰く、東は、則ち東明、西は、則ち西明。道に方所無し。故に、大明と曰う。

○白雲庵―円覚寺塔頭。東明慧目を開山とする。文化十四年―一八一七年。○無隠座原―白雲庵二世無隠恵燈。○東明禪師―東明慧日(一二七一―一三四〇)曹洞宗宏智派。九才で出家。一三〇九年、北条貞時の招聘に応じて来朝、禪興寺に住し、翌年、円覚寺に昇住し、後、円覚寺内の白雲庵に退居す。後、諸寺を歴住し、再び白雲庵に退居。暦応三年十月示寂。世寿六九。